赤武エンジニアリング株式会社 社内報

Akatake Times

BIMONTHLY
March | 2023
Vol. 53
（通算　第206号）

冬も終わりに近づき、暖かな季節になってきました。
マスク無し生活が普通になるならないという話もありますが、
結局花粉症で外せない人も多いんですよね・・・
季節の変わり目で体調も崩しやすいので、体調管理に気を付けて行きましょう。

『ホワイトクリスマス』

12/24 朝、起きて朝食を食べるまで外の状態を把握していませんでした。
ふと窓の外を覗くと一面が雪化粧されていてビックリ！そしてテンション爆上がり！！
「折角、愛知に居て雪が積もってるんだから名古屋城の写真を取りに行こう」
って軽い感じで外に飛び出したら早速車がすごい状態に…（汗）
車は危ないと判断して地下鉄と徒歩で名古屋城へ！
名古屋駅で乗り換えのために外へ出たらナナちゃんがクリスマスモードになってました！
朝早いから人も居なくて写真映りもバッチリ。
お目当ての雪化粧された名古屋城もしっかり撮れました！
役者の方も寒い中、ポージングありがとうございます！
出張先で迎えたクリスマスでしたが、とても充実していました。

撮影日時：2022年 12月 24日　　技術部　設計1課　小林浩幸さん

Message from Directors

～社歴のスタート～

◆「由来」

本号への原稿掲載は、本来であれば秋元常務の予定でした。体調不良で様子を見ながらということだったのですが、体調も優れないということもあり、急遽、私に依頼が。はてさてどうしたものか・・・考えた末、以前にも掲載されていたかも知れませんが、その後に入社した方も大分増えましたので、会社の起業の経緯、および社名の『赤武』の由来とロゴマークの意味について改めて説明したいと思います。

出来るだけ忠実にお伝えしたいので、社内報に掲載されていた元会長　故赤堀吉弥氏（以下、赤堀吉弥氏）の回顧録を一部抜粋して載せます。

その前に少しだけ赤堀吉弥氏について触れたいと思います。

創業者である赤堀吉弥氏は大きなハンデを負って起業されています。
大きなハンデというのは松葉杖を突いての生活です。やはり、回顧録の中で知ったのですが、赤堀吉弥氏が12歳のころ、骨髄炎（こつずいえん）で右大腿部を手術しており、その時、敗血症を併発してしまいます。その後3回の手術を受けたものの菌は両膝、両耳をも侵し、当時の医学では助ける方法がないということで、奇跡的に一命は取り留めましたが、その後の生活は松葉杖に頼らざるを得なくなってしまったと聞いています。

◆「抜粋(回顧録より)」

戦後、闇屋が横行していた頃、故赤堀博氏（前赤武(株)社長）が戦友「小原（こはら）氏」と、その恩師にあたる武内氏の3人でベルトの販売を始めました。このときの社名が「赤武商店」、赤堀の”赤”、武内の”武”をとって命名。
しかし、武内氏はお寺の住職でもあったので、一身上の都合で辞めることになり、閉店してしまいました。が、この時、小原氏が赤堀吉弥氏に弟の赤堀博氏と引き続き、ベルトの販売をやらないか、やるなら資本を出すという申し出がありました。この時、赤堀吉弥氏は郵便局員として働いていましたが、12年間働いた郵便局を辞め、赤堀兄弟で事業を再開し、社名もそのまま「赤武商店」としました。
その後、赤武(株)となり、そこから昭和46年9月に分離独立した赤武エンジニアリングが誕生しました。

赤堀吉弥氏の弟、画家である赤堀尚氏の芸大の後輩の方に、会社を象徴するロゴマークの製作を依頼。5･6候補の中から現在のロゴマークが選ばれました。
「赤武」の頭文字「A」の小文字「a」をアレンジし、太陽を思わせる赤い丸は、情熱とエネルギーを表し、コバルトブルーの部分は紺碧（こんぺき）の海と空、すなわち豊かさと無限を表しています。

◆「エピソード」

そんな赤堀吉弥氏ですが、私が今でも覚えているのは、出社されタクシーから降りた際に、丁度、影山運輸さんが製品を積み込み会社を出ていく姿を見て、「無事に運んでくれよ、しっかり頼むな（これは機械がしっかり動いてくれよという意味）」と何度か耳にしました。
こういった日常のことなのですが、製品への思い入れが伺えます。

本社・工場棟北側壁面に新たな看板を設置しました

赤堀吉弥氏との会話の中で、私が「会長、赤武の名前の由来は何ですか？赤武のロゴマークはどうしてできたんですか？」と聞いたことがありました。
いつかは回顧録のようなものを書きたいと思っていた赤堀吉弥氏が、それでは社内報で生い立ちから連載しようということで、以上のことが分ったのです。
あの時、赤堀吉弥氏の口から貴重な話を聞けてよかったと、今もしみじみ思い出されます。

取締役　山本　明生